

## レーダー画像解析とヘリコプターの 現地観測からみた大阪湾における 機船船びき網の漁場形成について

米田佳弘（関西国際空港）・

○吉田 司・大池一臣（シャトー海洋調査）

[目的] 関西国際空港に漁場監視用として取り付けられたレーダーの画像解析とヘリコプターの現地観測から、機船船びき網の漁場を把握し、漁場と環境との係わりについて行った解析の中からいくつかの事例を紹介する。

[材料および方法] レーダーは、空中線長 3,210 mm, 出力 25 kw, 周波数 9,740 MHz（古野電気株式会社製）を関西国際空港に、大阪湾全体が網羅できるように設定した。週 1 回の頻度でヘリコプターによる漁場の現地観測を行った。

[イカナゴ] 大阪湾におけるイカナゴの漁場は、漁期始めには、明石海峡を中心とした円弧状や帯状の分布を示し、大阪湾に形成される潮目や河川水のフロントと符合することが把握された。明石海峡周辺での海底からのまき上げによる著しい濁り水の存在は、機船船びき網を行う地元漁業者の間では昔から経験的に知られており、イカナゴ漁がこの濁り水の境、潮目を目指して操業されることを、筆者らもヘリコプターによる現地観測で確認した。

[イワシシラス] 大阪湾におけるイワシシラスの漁場は、漁期始めには、友ヶ島水道北部海域に形成され、その後、大阪湾東岸沿いに北上しながら形成されるものと大阪湾西岸の淡路島沿岸に形成されるものがあり、沖ノ瀬還流の外縁に沿った円弧状の漁場を示し、イワシシラスの漁場も一義的には流れに規定されるものであったが、大阪湾東岸を北上しながら形成される漁場は年によってそのルートに違いが見られ、湾奥からの河川水の勢力の違いによることが示唆された。